

内村鑑三に見る「無」

－「無教会」において－

鈴木貴久子*

(e-mail : kikuko7@hanmail.net)

目次

- 1.はじめに
 - 2.内村の「無教会」
 - 3.「教会」に台頭するもの
 - 4.「無」の形態
 - 4-1 キリスト教会との比較において
 - 4-2 仏教認識と「私」の「有」「無」
 - 4-3 キルケゴールとの比較において
 - 5.おわりに
-

1. はじめに

内村鑑三の「無教会」はキリスト教会とは異なる信仰形態として、内村の信仰姿勢を研究するに当って重要な課題である。既に多くの先行研究¹⁾がなされているが、その傾向は内村以降の「無教会」の継承に関する問題とキリスト教内の「無教会」の意義及び教

* 建陽大学校 日本語文化学科 専任講師

- 1) 韓国内の研究は博士論文김병국 「일본기독교와 우치무라 칸조(内村鑑三)의 無教会主義에 관한 연구」 김병국, 修士論文「内村鑑三의 無教会主義 批判 : 内村鑑三 全集을 중심으로」 전실현 などが見られる。これらは内村の「無教会」の教義に関する研究が主要であると言える。日本の「無教会」研究も多角的になされているが、本稿では鈴木範久『内村鑑三論』、山本泰次郎『内村鑑三の根本問題』、富岡『内村鑑三』を取り上げた。内容は当該文章で検討することとする。内村以降の「無教会主義」に関しては、内村から独立して「無教会主義」を展開した塚元虎二郎への賛否を巡り、高橋三郎の『無教会とは何か』と量義治の『無教会の論理』の間に討論が展開する。このように、「無教会」研究は韓国と日本の両国において先行研究が進んでいる分野であると言えよう。したがって本稿と関連する先行研究が見られるときには、本文で本稿の見解を提示することとし、差異点の明確化に努めたい。

義に関する問題の二つに大きく分けられよう。後者の「無教会」の意義及び教義は、「日本的キリスト教を尋ねたり、文化的キリスト教の可能性を求めたりしてはならない」²⁾という泉治典と、「日本的キリスト教」が「福音によっていかざれるとき、無教会主義になる」とし、「日本的伝統を抜きにして内村を理解しようという試みは」「不可能だ」³⁾とする主張する渋谷浩において対立を示すように、「日本的」なものを捉える視線において異なる。「日本的キリスト教」への見解の差が明確である。

本稿は、この「無教会」の意義及び教義に関するものであるが、「無教会」が追求する信仰姿勢において先行研究ではほとんど注目されなかった内村の信仰的動揺⁴⁾に注目した。真の信仰を目指し、終末論的に地上に「天国」を見い出すという「無教会」信仰の深化過程において、内村が選択した信仰的姿勢に日本的態度が露呈するのである。本稿は、「無教会」の「無」を巡る視線に焦点を当てた。「無教会」に日本的要素を確認する渋谷は、論理の根拠に「日本人の外来文化受容方法の一形式として類型化」された「接木の理」を見るが、本稿はこの「接木の理」にそのまま追従するのではなく、信仰の窮理において顕れた態度と「無教会」の「無」が内包するものとの連関を究明することで、日本的要素を考察した。また、これは内村の仏教に対する見解の変化にも連動するものである。さらに日本のかどうかの検証の考察対象として、西洋のキリスト者で、内村が「無教会主義」として先駆者とみたキルケゴール⁵⁾を取り上げ比較検討した。

では、具体的な論理展開の手順を提示する。まずは、「無教会」の性格を明らかにするとともに、教会で「無」いことで追求した思想は何か、教会に台頭して登場する概念及び形態は何かを確認する。この過程で教会の制度でなく信仰を強調したという「無教会」と、教会との差異点であるイエスを捉える視線、聖霊認識などに言及を加える。さらに、「無教会」の表明の中、日本の信仰的先祖と見た仏教認識の変遷との連動を確認する。日本的要素の検証として、内村が「余輩の先導者を称すべき者」⁶⁾としたキルケゴー

2) 泉治典(2007) 「『内村鑑三の無教会主義』—その聖書解釈にそくして」 『内村鑑三研究』第40号,キリスト教図書出版社. p.5

3) 渋谷浩(1980) 「内村鑑三の無教会主義における「二つのJ」」 『内村鑑三研究』第14号,キリスト教図書出版社. p.42

4) 信仰的動揺とは、内村の信仰路程である第一段階の「誓約書へのサイン」、第二段階の「キリストの十字架上の贖罪」そして第三段階の「再臨信仰」と、各段階に到達するために、体験する信仰上の葛藤、苦悩も挙げられるが、これらの信仰的動揺についての研究は多くなされている。上述の泉の論文でも、神学的苦悩は扱われているが、その分析は聖書学の対場からである。教会及び新神学に批判をなした内村の信仰の様相を、聖書学から捉え直す泉の研究は意義深い。本稿は、このあまり扱われることのない主題に対して伝統的日本の思想から分析を試みた点、視点が異なるということ、また内村の信仰的動揺の克服方法が他の論文では注目しないものであることが、新たな試みと言えよう。

5) セーレン・オービエ・キルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard, 1813年-55年) デンマークの哲学者、実存主義の創始者

ルのイエス認識と比較検討をすることで、「日本的キリスト教」と言われる「無教会」の「日本的」要素を明らかにすることとする。

2.内村の「無教会」

内村の無教会主義の性格から検討することとする。

「無教会」とは内村が初めから自らの主義として唱えたものではない。それは内村が不可避免的に教会から追放された状況を意味するものであった。日本は帝国憲法の発布（1889年・明治22年）、教育勅語の発行（1890年）によって国家神道体制を確立するが、その翌年、内村が勤務先の第一高等学校での教育勅語奉戴式⁷⁾において、最敬礼をしないことを契機に「不敬事件」が発生する。勤務先の退職を余儀なくされた内村は国賊として、社会から、国民から、教会からも排斥される。その心労から病に倒れる内村を看病した妻が逆に亡くなったときの心情を綴ったのが『基督信徒の慰』⁸⁾で述べられる。ここで、礼拝する場所を追われた状況を「無教会となりたり」と表現するのである。この無意識的に使用した無教会とは礼拝の場所としての建物が無いということの意味するのであり、後年登場する主義として意味合いは含まれていない。しかし、この時に経験する「無限と交通」「聖者と霊交を結ぶ」という信仰的体験は後の「無教会」の原型となるところである。

それでは、内村の言う「無教会」の定義は何であろうか。

「不敬事件」後、内村は万朝報での英文記者（1897年1月～1898年5月）として、あるいは客員記者（1900年9月～1903年10月）として辛辣な論客であったが、それと平行して『東京独立雑誌』（1898年6月～1900年7月）『聖書之研究』（1900年10月～1930年4月）を発刊し、聖書研究者として活動することになる。この聖書研究の教友のために発刊した『無教会』（1901年3月～1902年8月）の中の『無教会論』⁹⁾において「無教会」の定義として、「心霊の養成としての孤児院」としている。内村にとって、「無教会」とは制度を離れた心霊の交流する場であり、神との霊交の場であるという。この『無教会』の発刊前には、既に『洗礼晚餐廃止論』¹⁰⁾を通し、内村が建設に携わった札幌独立教会での洗礼晚餐存廃への自身の見解を述べる形で、その立場を表明す

6) 内村鑑三(1981)「無教会主義の前進」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.491

7) 明治天皇が国民道徳の根源、国民教育の基本理念を明示するために下した勅語に敬礼すること、教育機関に幕によって隠された天皇の写真が掲げられ、敬礼が強制された。

8) 内村鑑三(1962)「基督信徒の慰」『明治文学全集39』筑摩書房. p.18

9) 内村鑑三(1981)「無教会論」『内村鑑三全集9』岩波書店. p.71 雑誌『無教会』創刊号の社説

10) 内村鑑三(1981)「洗礼晚餐廃止論」『内村鑑三全集9』岩波書店. p.52-56

る。即ち、「聖式に与からざるが故に墮落の危険」にある者はいずれ墮落するのであり、洗礼晩餐をしなくても、「最終まで信仰を維持する者」が神の選んだ者であるとし、「聖式不必要論を実行」することを求める。それは、「聖式に付着する多くの迷想誤信を排」するためであり、「霊の力」を頼ることを通して可能であることが述べられる。この独立教会については『独立教会の真義』¹¹⁾で「イエスキリストにのみ依て建てられたる教会」であるとし、「神の聖霊に導かれて期せずして成った者が真個の神の教会」と、教会が信仰維持のため、また信仰を養う所ではないことを表明している。独立とはキリスト信者の独立を意味し、外国宣教師や教会に依頼しない「信仰の唯一の試験石」だという。内村が強調するのは外国宣教師からの独立¹²⁾であるが、この外国人宣教師への嫌悪は、もともと内村のキリスト教信仰が札幌農学校時代から教会からの独立を目指す傾向があり、アメリカ留学におけるキリスト教経験を通し、緒宗派の闘争¹³⁾の実体やキリスト教会での信仰の証でお金を稼ぐという、留学生の信仰姿勢などに疑問を抱き、教会には心理的に一定の距離をおくものとなっている。特にアメリカの宣教師に理想を見い出すことができなかった。内村の無教会はこれら教会に対する心理的嫌悪感を内在するものでもある。

また、信仰を態度における儀礼でなく実質面において強調するのは、『信仰のすすめ』¹⁴⁾で「洗礼を受けて信徒になるのではなくして神を信じて信者になる」のであり、「晩餐式に与かって天国に入るのではなくして神の律法を実行して神の国に再び生まれる」としている。そして教会が不要であることは『新教会』¹⁵⁾で、教会堂には牧師・洗礼・聖餐式・楽器と教壇を備えた教会もなく、神・キリスト・聖霊、また神と人を愛する心があって「上に蒼窮を張り、下に青草を布きたる天然」だとする。教会の要不用に関して『初代の教会は如何なる者なりし乎』¹⁶⁾において、初代の教会と今の教会を比較しており、洗礼式・聖餐式があって「神を礼拝するところ」が今の教会であり、「神を信ずる者の作った社会」が初代教会で、即ち、天国又は神の国を地上に実現しようとする試みの場所であるという。教会と訳するギリシア語「エクレージャ」は、「外に呼び出されし者の集合体」であるが、それはイエスをキリストと認める霊的会衆、即ち「愛を以て法則となす家庭的団体」¹⁷⁾であって、教会は「キリストの理想を離れて」建設されたとし、「無教会」が一貫

11) 内村鑑三(1981) 「独立教会の真義」『内村鑑三全集10』岩波書店. p.62-64

12) 内村鑑三(1982) 「無教会主義の利益」『内村鑑三全集20』岩波書店. p.331 「宣教師は信仰の大なる誘惑者」であるとし、「宣教師より遠ざらんために丈けても無教会主義を採るの必要がある」

13) 内村鑑三(1962) 「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」『明治文学全集39』筑摩書房. pp.103-104

14) 内村鑑三(1981) 「信仰のすすめ」『内村鑑三全集9』岩波書店. pp.160-163

15) 内村鑑三(1981) 「新教会」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.66

16) 内村鑑三(1982) 「初代の教会は如何なる者なりし乎」『内村鑑三全集17』岩波書店. pp.276-279

17) 内村鑑三(1982) 「エクレージャ」『内村鑑三全集17』岩波書店. pp.204-207

して靈的な団体であることを主張する。

以上の通り、「無教会」とはイエスキリストを中心とした、制度を離れた心霊の場として信仰を重視する。これが神の国へと来世重視に傾倒し、『神の国と其義』18)に見られるように「キリストの再臨に由て彼が万物を己れに服わせ得る能力を以て実現し給ふ未来の聖国」と、キリスト再臨に由る実現が顕著に唱えられる。つまり、無教会主義に関する言及が減少していくのに対し、神の国及び再臨への待望を表す言及が増えていくことが注目されるのである。「無教会」は制度の否定という外面的な指摘であるが、それでは、その制度を否定することで重視したものは何であったのか、内面的な信仰的变化に関して検討する。

3 「教会」に台頭するもの

前節で確認した「無教会」の性格とは、まずは教会から追放されたことによる、礼拝の場、即ち教会の建物が無いことを意味し、次に洗礼式・晩餐式などの制度の廃止であり、教会に代わって重視するものがイエスキリストを中心とした信仰そのもの、神を愛する心であるとする。それでは、具体的に教会に代わって重視する信仰的意識について確認してみる。教会の制度を否定した内村が重視したものは、雑誌『無教会』『信仰のすすめ』において「神を信じて信者になる」「神の律法を実行して神の国に再び生まれる」19)とするように、信仰と神の律法の実行である。この行為を重視する面は、内村は万朝報の「理想団」に所属し、社会改良に積極的に取り組んでいたことに思想的根拠が一致すると言えよう。「理想団」とは万朝報の社長黒岩涙香が主張した「社会改良を目的として成った団体」「自身を改良して然る後に社会を改良せんとする団体」であり、「神の聖旨」である社会改良を「外よりするの改革も亦多くの場合に於ては内よりするの改革を助くる」と「熱心に其實行を計るべき」と内村は実行を強調する。しかし、内村は社説と意見を異にする日露戦争の非戦を提唱、退社することで「理想団」を離れる。その時、現世・日本国については語らないこと、時事問題に関する発言を控えることを表明し、社会改良に関する視線も転換を迎えている。これは行動という外的側面から、神と私の関係、即ち内的側面・信仰重視への移行に連動するものである。私自身が義であるのではなく「神我が衷に働き」「強き神が弱き我に顕れ」20)、義であるキリストが「信仰を以て彼を我有となせば足る」21)と救済が信仰によることを強調する。

18) 内村鑑三(1981)「神の国と其義」『内村鑑三全集18』岩波書店. p.230

19) 内村鑑三(1981)「信仰のすすめ」『内村鑑三全集9』岩波書店. p.160

20) 内村鑑三(1981)「我が基督教」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.284

また、教会に代わって頻繁に登場する「神の国」「天国」は基督教における重要な概念であるが、「教会失せて後に始めて天国現はる」²²⁾と、内村は「天国」を教会に対立するものとして見なす。『無教会主義の前進』²³⁾においても教会は「靈的団体」になるべきであるとし、これが教会になった場合には「無教会主義を以て又之を壊つべき」で、「永久に壊れて永久に築く」生物のようなものだし、この無教会による「結晶せる教会の破壊」を通して「キリストの王国」は建設されると主唱する。さらに、信仰そのものを重視する視点は、イエスのキリストとしての神性に関心を集中することとなる。このイエスの神性に関する問題は、植村正久・海老名弾正間の論争²⁴⁾に代表されるところでもあり、内村も無関係ではいられなかった。信仰的苦悩を示す具体例にイエスの神性の証明としてのマリアの処女懐胎がある。これは、当時の大部分の神学に否定された問題の一つであるが、内村はパウロの聖句²⁵⁾の解釈を挙げて、イエスの誕生が奇跡として、生命の進化として「人類以上の生命を此世に持来すために必要であった」とし、肯定の立場²⁶⁾をとる。しかし、その1年後(1908年)に『パウロのキリスト観』²⁷⁾という文章では、「余輩も一個人としては、処女の懐胎、キリストの先天的神性を信ずるに躊躇しない者である」としながらも、処女懐胎に対する神学者の否定的見解を容認した意見を提示するのである。即ち、イエスの神性をパウロのいう「其靈に於て神より離れたる者である」「死者の蘇り」が「人の靈魂に於て行はれつゝある」「靈的復興」を以てなされることを示し、「キリストの神性を彼の肉体に関する記事に於て認むるのは甚だ危険だ」と前説を否定する見解を提示するのである。つまり、イエスの神性の証明を、その誕生の奇跡・復活に見るのではなく、史実として死者の復活をなしたその靈性に見るのである。これは新神学的見解への傾倒と言えよう。このような新神学的傾倒は内村自身『新学瑣談』²⁸⁾でもその影響を言及するが、一方で新説に満足できずに旧き福音のみを唱える²⁹⁾と新神学とは距離をおくことを表明することとなる。

21) 内村鑑三(1981)「我が信仰の途」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.409 後述する本稿の主題である「無」の対立項である「有」に注目したい。

22) 内村鑑三(1981)「教会と天国」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.66

23) 内村鑑三(1981)「無教会主義の前進」『内村鑑三全集14』岩波書店. pp.489-491

24) 芦名定道(2006)「アジア・キリスト教研究に向けて(2)ー方法と適用ー」『アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会第4号』, 「アジア・日本のキリスト教と宗教的多元性」研究会. pp.43-62 イエスの神性を否定した海老名は異端とされ、教会から追放される。

25) 内村鑑三(1981)「処女の懐胎は果して信じ難き乎」『内村鑑三全集15』岩波書店. p.283
パウロの加拉太書4章4節の「彼は女より生れ」

26) 内村鑑三(1981)「処女の懐胎は果して信じ難き乎」『内村鑑三全集15』岩波書店. pp.283-291

27) 内村鑑三(1982)「パウロのキリスト観」『内村鑑三全集16』岩波書店. pp.126-130

28) 内村鑑三(1981)「新学瑣談」『内村鑑三全集15』岩波書店. p.166

29) 内村鑑三(1981)「今より後」『内村鑑三全集15』岩波書店. pp.432-433

このような神学的苦悩は福音的信仰姿勢を以て終結を見る。イエスが「神の栄の光輝、其質の真像にして世の創始より父と栄光を共にせし者」³⁰⁾であることを主張、神なるイエスが「神の国」を建てる者だ³¹⁾とするのである。それは、イエスの神としての認識、「完全なる人」としての認識³²⁾を強調するものである。即ち、イエスキリストは「神として崇め」「人として愛」する神と人の一体化した存在であるとし、イエスの贖罪に関しては靈性上の事実として捉え、この理由は問うこと事態が無益だ³³⁾という。また、十字架における贖罪についての認識方法も「其学説的説明」は知らないとし、それは「聖霊が我衷に降り」という心霊的実験によって経験されるもので、証明には認知が及ばない³⁴⁾とする。そして、この「神の国」「完全なる人」としての「キリストの再臨」³⁵⁾への希望へと展開していくのである。非戦を唱えた内村は、平和の実現を「キリストの再臨を待て初めて世に行はるゝ」³⁶⁾と、「神の国」の到来とともに、世紀末的状况の收拾にはイエスの再臨、即ち「完全なる人」としてのキリストの再臨に希望を見出す他なかったと言えよう。内村の「無教会」は、したがってこのイエス「完全なる人」が建設する「神の国」への再臨という段階に役割を託すこととなる。

ここで検討したいのが、この神学的態度なのである。イエスを神と人の一体化した存在とする「其学説的説明」は知らないとしたこと、イエスの神人一体化は「聖霊が我衷に降り」という心霊的実験によって経験されるという内村の信仰的態度は、実はそれまでの多くの研究では指摘されていない。信仰の根拠を実験において見出すことは多く言及されたが、「無教会」信仰の深化過程でイエスの神人一体化した存在であるとの信仰の核心に至るにまでに、動揺し、論理よりは実験的に、さらには証明は必要ないとするまでの態度は問題にはされなかった。それは、内村を先生として、偉大な信仰と見た視点からは、困難な態度であると言えよう。動揺・曖昧さは先生に対して、偉大な信仰者には相応しくないからであろう。しかし、動揺・非論理的曖昧さがあつたとして、内村の信仰が過小評価されるのではなく、むしろ、現実に則し、実存的生に迫るものとして内村の信仰的特徴を再検討する材料ともなろう。

「無教会」は最終的に「此世に於て実行不可能の主義」³⁷⁾だとし、それは「キリスト

30) 内村鑑三(1982)「キリストの神性」『内村鑑三全集16』岩波書店. p.136

31) 内村鑑三(1982)「イエスと教会」『内村鑑三全集16』岩波書店. p.208

32) 内村鑑三(1982)「贖罪の真義と其事実」『内村鑑三全集16』岩波書店. p.265

33) 内村鑑三(1982)「贖罪の真義と其事実」『内村鑑三全集16』岩波書店. p.263

34) 内村鑑三(1981)「余がキリストを要する時」『内村鑑三全集18』岩波書店. pp.128-130

35) 内村鑑三(1981)「近來の信仰に就て」『内村鑑三全集18』岩波書店. pp.96-99

36) 内村鑑三(1981)「世界の平和は如何にして来る乎」『内村鑑三全集18』岩波書店. p.239

37) 内村鑑三(1983)『内村鑑三全集35』岩波書店. p.510 日記 1929年10月24日

の再臨を持って其実行を見る主義」でそれは「理想である」と実現の困難なことを述べる。即ち、キリストの再臨にその役割を委ねた「無教会」主義はまた、キリストの再臨と共に実行され得るものであったのである。

4. 「無」の形態

この節で取り扱う「無」の形態とは、教会という「有」に対する「無」であり、教会を脱するという「有」から「無」への転向がもたらす、あるいは志向する新たな様式に関する検討である。前説で見た教会に台頭するものとして提示した「神の国」「天国の建設」「エクレーシヤ」などが「無」によって浮上する様式だと言えるのであるが、「有」である教会との差異点を検討するとともに、その差異点が内村の仏教認識の変化に連動することからも考察したい。特に日本的キリスト教との関連で、先行研究に見られるキリスト教の神学的面や思想的面からの批判とは異なる日本的要素を確認したい。富岡は『内村鑑三-その偉大なる』38)で「無教会の「無」」に言及して、京都学派の主張が「主体的無の立場」による“近代の超克”は、そのまま共同体倫理と合同する」とし、日本社会に埋没する「私」の「無」であることを指摘した。一方、富岡自身の見解としては、内村の“近代の超克”は「いかなるかたちにおいても共同体の思想と合致することはなかった」とし、共同体の思想は「再臨」の思想により解体されるとした。本稿でも「無教会」が再臨信仰に連動していくことは言及したものの、富岡のように「再臨」の思想に直接的に飛躍し、「主体的無の立場」による“近代の超克”が次元を異にする「再臨」の思想によってなされるとするのではなく、その前段階として私の「有」から「無」への転換において神との関わりに決定的変化が起っていることを以て説明した。即ち、「私」の「有」「無」の様相がキリスト教における神観に表れる変化に注目した。さらに、無教会は教会のアンチテーゼとしての要素があるのであるが、内村がこの無教会が単独のものではなく、「余輩の先導者を称すべき者」39)と見たキルケゴールの信仰姿勢についても、形態が類似している要素があるのかを検討する。

4-1 キリスト教会との比較において

では、まずはキリスト教との比較から見る「無」については、内村の無教会の重要な要素である聖霊の働きについて検討する。上述で教会に台頭してくる様式が、聖霊の働きを

38) 富岡幸一郎(2004)『内村鑑三 偉大なる罪人の生涯』リポート。pp.126-134

39) 内村鑑三(1981)「無教会主義の前進」『内村鑑三全集14』岩波書店。p.491

通して導き出されることに注目し、内村が一般のキリスト教会との差異点と見なした聖霊観に「無」の意味を考察する。

そもそも内村は、雑誌『無教会』を発刊したころ、即ち万朝報で新聞記者として「理想団」に属し、社会改良に対する積極的な発言をなしていたころ、社会問題に積極的に取り組むとともに、洗礼晩餐廃止論を唱えるなどの形式に対する批判を行っている。この制度の否定、即ち、制度で“無い”というのが「無」の意味であった。信仰の深化路程において聖霊を通し、神認識に変化が見られるようになり、イエスをキリストとして、完全なる人として認識いくことに聖霊が大きく役割を果たすことになるのである。聖霊の働きはキリスト教会ではリバイバル（神霊復興）であり、それは伝道的手段として、霊的感化による信仰動機の誘引であるが、内村はキリスト教入信の当時から、リバイバル体験に失敗する⁴⁰⁾ばかりでなく、その光景を感情的狂気⁴¹⁾であるというのである。その一方で、聖霊の降臨を待望する思いは強く、信仰に自信がなくなると、さらにイエスの神としての存在を認識するときの方法として、聖霊の降臨を求めている⁴²⁾ことが確認される。聖霊への関心が高まってくるのは、朝鮮での聖霊降臨⁴³⁾以降であり、自らの聖霊体験もあいまって聖霊によるイエス認識の記述は増す。内村の聖霊体験は『聖霊を受けし時の感覚』⁴⁴⁾において、これ以上の平和、平康がないとし、「過去は全て忘れられ、我れ未来は希望満々たり、人生の意味は判かり」「天国」であることを述べる一方、自らが聖霊を受けた感覚とリバイバルとを比較し、リバイバルを「自覚を失ふこと」「狂気すること、心神が転倒することである」と批判している。内村の聖霊を受ける方法⁴⁵⁾は、「餓渇く如く神の義なる聖霊を慕ふ」こと、祈禱と聖書研究が必要であり、聖霊の獲得は「信仰の行為に由るのみ」であり、「実行は洵に最も有力なる祈禱である、働らくは祈るなり」と、聖霊の働きが現実の行動によってもたらされることを主張するのである。「無教会」の主張は、初めは理想団に属した新聞記者、兼、聖書研究者として、政治・国民道徳など社会改良に関する発言を多くなしていた文脈の中で、教会制度に対する外面的批判であったことが指摘されようが、社会に対する不発言を宣言した新聞社退職以降も、聖霊を獲得する方法として、行為としての働きかけという、「私」の「有」の面が残っていることに注目しておきたい。

ところで、「無教会」を内村の思想の根幹である、2つのJ、日本とイエスを同時に愛

40) 内村鑑三(1962)「余波いかにしてキリスト信徒になりしか」『明治文学全集39』筑摩書房 pp.66-69

41) 鈴木貴久子(2009)「内村鑑三に見る聖霊の働きに関する一考察」『比較日本学20号』,漢陽大学校 日本国際比較研究所. pp.55-69

42) 内村鑑三(1981)「聖霊の要求」『内村鑑三全集10』岩波書店. pp.14-15

43) 関庚培(1984)『韓国基督教教会史』大韓基督教出版社. pp.249-254

44) 内村鑑三(1981)「聖霊を受けし時の感覚」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.227

45) 内村鑑三(1982)「如何にして聖霊を受けん乎」『内村鑑三全集16』岩波書店. pp.84-91

するという観点でその意味を分析すると、それは宣教師に依存しないことを支柱とした日本の独立に眼点が置かれていることが指摘できよう。内村の生きた時代がキリスト教解禁から間もない時代であることを勘案したとき、日本はキリスト教の源泉を持たないと言えるが、内村は日本人のキリスト教信徒としての可能性を『代表的日本人』でも模索していた。さらに宗教心の資質を、伝統的宗教として定着した仏教に求めており、仏教の中イエス信仰に近いとされる阿弥陀信仰である浄土宗の始祖・法然を信仰の祖先と呼び、日本人にキリスト教の精神的素質を論証している。この仏教認識が聖霊の働きによって変化をなすことは他の論文でも指摘したところではあるが、この仏教認識が聖霊の働きに関わる「私」の「有」「無」との連関性、即ち、上述した「無教会」に台頭する様式の変遷に連関することを、以下に展開したいのである。ここで登場する「私」の「有」「無」が「無教会」の「無」という意味を分析することとなる。検討に入る前に、確認しておきたいのは鈴木範久の言及である。鈴木は『内村鑑三』46で「無教会」の「無」を「教会を否定する言葉としては用いず、教会のない者の意味で使っている」とし、それは「最後まで教会そのものを否定するものではなかった」と言う。これに関しては筆者も否定するものではないが、この「無」が「仏教思想でいう「無」に近いもので」「対象を相対化し、究極的には、より高い次元での肯定を意味する「無」である」としている。この仏教思想の「無」との類似性に関し、内村の変遷する仏教思想との対比を以て本稿の主張を示したい。

4-2 仏教認識と「私」の「有」「無」

内村の仏教への関心は、『代表的日本人』47で日本を代表する5人の人物の1人として日蓮⁴⁸を紹介するほど早くから高い。ここでは、日蓮を当時物心両面における援助が与えられていた宣教師学校及び教会とを比較して、その独立性を称えている。内村の仏教認識をそのキリスト教との距離感から見ると、日蓮をキリスト教とは無関係に単独に評価する時期、キリスト教のイエスを頼る態度と浄土教の阿弥陀⁴⁹を頼る態度の類似性を強調する時期、そして仏教の自力宗と他力宗⁵⁰に対し、キリスト教の神の導きによる恩賜、即ち聖霊の役割を以て初めて絶対的他力となるとし、仏教とキリスト教の相違を明確にする時期と

46) 鈴木範久(1984)『内村鑑三』岩波新書. p.117

47) 内村鑑三(1962)「代表的日本人」『明治文学全集39』筑摩書房. p.187

48) 日蓮(1222年-1282年)鎌倉新仏教の祖師の一人。日蓮宗の開祖

49) 阿弥陀仏は、別名を無量寿仏といい、無量の寿命を持つ仏・無量の光明発する仏とされる。阿弥陀仏が仏になる前に、立てた誓願に、自分の国に生まれたいと念ずる衆生を必ず往生させるという願い(48の誓願の第18願)がある。これらの誓願を完全成就して阿弥陀仏となり、現代も西方極楽浄土で説法している。

50) 他力宗とは、他力によって極楽往生を求める宗門。浄土教、浄土真宗、各宗派。阿弥陀仏を信じて念仏によって、救済される。自力宗とは、自力によって悟りに至る宗門。天台宗、禅宗。修業によって救済される。

いうように、大きく三段階に分類することができる。本稿はこの第二段階より第三段階に移行する契機を捉えたものである。仏教とキリスト教の類似性を否定し、相違点の強調した段階への移行に先駆けて、現れた思考の変換の契機を注目した。それでは、具体的に文章を追ってみる。

キリスト教と仏教の類似性を強調したのは『日本人の宗教心』においてであり、「われらがイエスを仰ぎ奉る心は、法然⁵¹⁾、親鸞⁵²⁾が阿弥陀仏に依り頼みし心に似て」⁵³⁾いるとし、浄土教がキリスト教の源泉となる信仰心と見なしている。上述の通り、「無教会」を主張する内村は、新聞記者も兼ねた聖書研究者として社会に対する直接的な改革を促すべく、理想団に属し、政治・国民道徳など、社会改良に関する発言を多くなしていたが、社会への外面的な批判という観点で、教会制度に対する批判を行っていたと言える。また、一方で日本とイエスを愛する内村の根幹的思想を鑑みると、⁵⁴⁾「無教会」が宣教師に依存しないという、日本の独立に主眼が置かれる点、キリスト教信仰の定着する基盤を、従来の宗教である仏教で、依頼する対象があるとする阿弥陀仏信仰である浄土教にキリスト教との構造的類似性を見出すことにより、宣教師への依存から脱出する根拠として確信したかったのだと言えよう。それは、アメリカ流のキリスト教が現世を重視するのに対し、来世を重んじた内村は「寧ろ法然又は親鸞流の仏教信者たらんことを欲す」⁵⁴⁾とし、また「我は彼等が弥陀を慕ひし其心を以て我主イエスキリストを慕ふ者」と、「源信、法然、親鸞に対しより近く感ずるは止むを得ない」と「信仰の目的物に対し心の態度を同うする者」との位置づけを行っている。同日の他の文章において、宣教師への批判を加え、「信仰の性質は之を源信、法然、親鸞と共にし、伝道の方法は之を仁斎、藤樹、益兼等に習ひ、以て外国人に頼ることなくして、此国に在りてキリストを信じて彼の福音を伝ふべきである」⁵⁵⁾と、宣教師からの独立を主張している。このように仏教に信仰の源泉を見い出そうとしていた内村が、仏教に対する見方を一変させるのがその半年後で、「対象に対する信仰に態度に就いては法然親鸞に学ぶ可き所が多い」としながらも両者の差異を「其根本に於て全く異なる者である」⁵⁶⁾だとする。さらに『基督教と仏教及び儒教』でこれらの根本的相違を知ることの重要性を唱える。それは類似性を認めていた浄土真宗の教義である3部経を聖書に比較し、無量寿経法蔵比丘の第18願だけが恩恵であることを指摘、「其幼稚なるに驚かむ」と「法然親鸞の深き心を察する時は同情に耐えない」⁵⁷⁾とまで言う。

51) 法然(1133年-1212年) 鎌倉時代の僧で、浄土宗の開祖。

52) 親鸞(1173-1262) 鎌倉時代の僧で、浄土真宗の開祖。

53) 内村鑑三(1981) 「日本人の宗教心」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.366

54) 内村鑑三(1982) 「米国流の基督教」『内村鑑三全集21』岩波書店. pp.374-375

55) 内村鑑三(1982) 「寧ろ儒者に倣ふべし」『内村鑑三全集21』岩波書店. pp.345-348

56) 内村鑑三(1982) 「簡單なる信仰」『内村鑑三全集22』岩波書店. p.177

キリスト教との教義との徹底的相違がルーテルの信仰の「十字架上のキリストを仰ぎ」みる十字架信仰であることの強調へ、贖罪の意義を重視⁵⁸⁾しているのである。

それでは「無教会」の「無」を検討する上で、この仏教観の変遷をもたらす聖霊の働きを私の「有」「無」との関連性において考察してみる。キリスト教の聖霊の働きであるリバイバルには否定的である内村が、自らの信仰を守るために聖霊の降臨を求めた時期から、聖霊の降臨により信仰の復興が起こっている韓国への憧憬、そして、それとは対照的な日本の信仰姿勢へ焦燥観を抱いた時期、そして、聖霊が直接的に自らに働きかけ変容をもたらしていく時期へと、内村の聖霊との関わりは変化していく。即ち、「私」の「有」「無」との関連から捉え直すと、まずは、私の意志が残っている「有」の表現を確認する。キリストの捉え方で、キリストが我を義とするのではなく、「我が義」なのであり、「我は信仰を以て彼を我が有となせば足る」と私なる「有」が行為している。これは5年後（1913年）の『教会問題の解決』⁵⁹⁾という文章でも同様の文脈で、イエスキリストに我が「靈魂を委ね、彼の僕になり、枝とな」という私のなす行為が「有」として残っている。同文章で「無教会」との表現は用いていないものの、教会問題の解決として、「完全なる満足」が「彼に依頼むすべての人の靈魂に宿り給ふ」とするように、イエスキリストへ依頼む自らの意志を確認できるのである。それが「私」が「無」として登場してくるのは、3年後（1916年）からで「自分以外の或者の占領すると所となった者である、最早我れ生けるに非ず、基督我に在りて生ける也」⁶⁰⁾とし、「事をなすのではない、既になされし事」と「私」の行為でないことを表明している。上述の浄土宗・浄土真宗との決別を決定的に表明した講演でも、注意点として「自分」という問題を取り上げ、「「自分」を無くする事之れ信仰の初である」と「私」の「無」を強調している。「自分をやめ」完全にキリストを信仰している状態である、即ち「私」の行為ではない「私」の「無」の状態、「私」の「無」の信仰へ到達するのである。この「私」の「無」という段階は仏教をキリスト教受容の精神的支柱として、阿弥陀とイエスという頼れる存在に構造的な類似性を見なした、仏教への親近感を完全に否定し、十字架という、本来のキリスト教の信仰の中心である教義を相違点として主張する時期と重なっているのである。十字架を重視するのが、つまり聖霊の働きとして、「無」になった「私」へ連結していくのである。信仰する力さえも神から与えられているとした行為する「私」の「無」、そしてイエスキリストへの絶対的信仰へと「私」なる存在の「無」は連動しているのである。この仏教観はその5年後（1922年）に内村が宗教を自力と他力に分けて、「浄土門の仏教は他力宗であるが、絶対的

57) 内村鑑三(1982)「我等も亦去らんと意ふ乎」『内村鑑三全集23』岩波書店. pp.323-324

58) 内村鑑三(1982)「大胆なる信仰」『内村鑑三全集23』岩波書店. p.373

59) 内村鑑三(1982)「教会問題の解決」『内村鑑三全集20』岩波書店. p.109

60) 内村鑑三(1982)「繰返し」『内村鑑三全集22』岩波書店. p.184

他力宗ではない」⁶¹⁾と表明した先駆的な体験の表れであったと言える。

もう一度、「私」の「無」を整理してみるとしよう。「私」の「無」とは、仏教をキリスト教からはっきりと区別した時期に、それまで、信仰として新神学の影響下にあつて、イエスキリストに対する信仰への苦悩に終止符を打ち、十字架信仰を中心とした、かつ、「私」に直接的に働く聖霊を通したイエスキリストへの信仰的確信を確立するときの形態であることが確認できた。教会との関係についていうなら、教会という建造物、制度、儀式の否定を主張していた「無教会」の論旨から、信仰的な私の在り方を模索し、イエスキリストが直接的に「生きてともにある」という、聖霊の働きを通した「私」の「無」へと、即ち、信仰的な深化過程として教会の制度を否定した信仰の在り方から、「私」が生きているのではなく、キリストが生きているという「私」の「無」という信仰観へ導くものであった。

それでは、この「私」の「無」に集約した「無教会」が如何に日本的であるか、あるいはそうでないかを検証するために、内村が「無教会」の先導者を見なしたキルケゴールのイエス認識を対照的に検討してみることにする。

4-3 キルケゴールとの比較において

「無教会」が日本的か、そうでないかに関して、デンマークの思想家であるキルケゴールのイエス認識に関する著書『哲学的断片』⁶²⁾を検討してみる。内村は『大野心』において、キルケゴールの言として「全世界に一人の信者なきも独り確実なる基督教の信仰に達せんと欲す」⁶³⁾を引用し、内村自身「唯一の基督者たらんことを求ふ」ことを表明するなど、多数キルケゴールを無教会者として紹介している。『哲学的断片』を検討著書として取り上げたのは、内村がキルケゴールの『瞬間』を「基督教と教会」と題し翻訳したものを『聖書之研究』に掲載しており⁶⁴⁾、その「瞬間」及び、本稿の中心的主題である「無」について、即ち「非なる存在」から「有」の生成に関して考察したものであるためである。

それでは、真理の認識に関するソクラテスとキルケゴールの主張を『哲学的断片』に確認してみよう。ソクラテスの真理認識とは想起⁶⁵⁾することを意味し、「無知なる者は自分が

61) 内村鑑三(1983)「二種の宗教」『内村鑑三全集27』岩波書店. p.18

62) 梶田啓三郎編集(1985)『キルケゴール 世界の名著51』中央公論社. pp.120-142

63) 内村鑑三(1981)「大野心」『内村鑑三全集14』岩波書店. p.147

64) 梶田啓三郎編集(1985)『キルケゴール 世界の名著51』中央公論社. p.45
『基督教と教会』というタイトルで「聖書之研究」第164号から172号まで掲載された。

65) ソクラテスは生れる前に知っていた知識に対話法で導いたが、この思い出すことを想起とした。弟子のプラトンによって継承される用語である。プラトンにおいては人間の魂が真の知識であるアイデアを得る過程として、人間の魂が真の認識に至る仕方を、生まれる前に見てきたアイデアを思い起こすこととして説明した。アナムネーシス(anamnesis)

知っている真理を自分自身で思い出せるように注意を呼び覚ます」ことだとする。この時、真理とは永遠の昔から知られていて、結局は永遠のうちに吸収される場所となり、神の存在とは「歴史とは無縁の世界の消息」ということになる。一方、キルケゴールは「神の受肉」という「歴史的事実」「神が人間の姿をとって世にありたもうたという歴史の出来事」の「逆接」を認識するとは、即ち自分とは絶対的に異質で隔絶しているものを認識するとは、「絶対的異質のものを思考の対象とはできない」理性には不可能であるため、神からその真理を示されなければならないとする。「永遠」なる神の「有限」なる人間に生まれるという、「逆接」なるイエスの存在を、即ち「歴史」と「永遠」とが出会い、歴史は永遠と化し、永遠は歴史と化す」不条理を、神が与える「永遠の能力」即ち、「瞬間」において理解することが可能になるのだという。「信仰」とは生成してきたものの現実相を信受することであり、生成してきたものの可能相を己のうちに止揚するもので、この「信仰」の飛躍が神の「瞬間」において可能なのだという。

さて、内村の神認識であるが、上述した通り、神が「私」に来て、「私」は無くなる、無くなったところにイエスがともにあるとするのである。「私」そのものがこのイエスを直接認識できるのではなく、神からの聖霊の恩寵によってイエスの認識が可能であるとするところは、キルケゴールの「瞬間」における神と人間との接点の解釈に通じるものと言える。キルケゴールのいう絶対的差異、神の前の単独者という概念は内村の『交際と最後の審判』66)に「単独で神の前に立たなければならない」とした言及からも、その絶対的差異を見つめる内村があったことも考慮されていだろう。しかし、もっと注意深く両者の見解を確認するなら、「無」という要素に注視せずにいられないだろう。内村の「私」は「無」になるのである。「私」が置かれた場所を確定しないのである。キルケゴールに関して言えば、神との接点の追求は「私」それ自体が求めた終着点であり、「私」として神を知り得た「私」の探求なのであり、神との出会いをなすことに意義があるのである。しかし、内村にあっては、神に満たされた「私」は無くなる。無くなって神が充満するとは、神と出会った「私」自身が存在したままで究極目的を果たすことではないということだ。最後まで「私」が存在する「有」であるキルケゴールと「私」が「無」となってしまう内村とは「私」の「有」「無」において決定的に異なるのだ。

それでは、ここに指摘したキルケゴールと内村の神認識の差異が日本的なものによるかを検討してみる。相良享の『日本の思想「理・自然・天・心・伝統」』67)によれば、日本人のこころとは、「おかれた場における主観的心情の純粹さの追求」つまり、「心情の無私性の追求」であり、「本来的なありようとしての心を対照的に把握する姿勢が熟さなかった」と特徴づけている。ものの本質・本性・秩序といった客観的視角が欠落している

66) 内村鑑三(1981)「交際と最後の審判」『内村鑑三全集18』岩波書店。p.29

67) 相良享(1989)『日本の思想「理・自然・天・心・伝統」』ペリカン社。pp.215-223

状態であり、窮理の姿勢がないことも指摘している。この心情の純粹さの追求は、伝統的なまこと・まごごろという心情として、物我一体・自他一体となっていることを示している。この点を丸山正男も日本人の精神としては「である」ではなく「になる」という、究極に関心を持つのでなく、今どう生きていくかの現状面に焦点を当てるものであると指摘している。これはまさしく内村の「私」の「無」に至った経緯であり、物我一体・自他一体とも神と我の一体といえる「私」の中に訪れた聖霊が働いた状態、即ちイエスキリストとの一体の状態を意味するのである。他者の認識は「私」の「無」に活路があったのであり、キルケゴールの「瞬間」に相当する論理的証明はなされなかった。むしろ、イエスの神認識を、新神学からの信仰の揺さぶりの中に聖書の文言の検討などにより、形而上的な証明方法の試みは見られるものの、最終的にはマリアの処女懐胎とか復活とか論理的証明の困難なものに関して、不可知とする態度をとるのである。キリスト教と仏教の相違を主張した年に『信仰の実質』において「復活を信ずるのである、永生を信ずるのである、窮りなく存つ所の天国を信ずるのである」と「充分の証拠があって信ずるのは信仰ではない」⁶⁸⁾とし、また「真の信仰」を「信じ難きことを信ずる」「神我を殺し給ふとも我は彼の愛なるを信ぜん」⁶⁹⁾と主張する。信仰が「唯単に彼を信じ彼に信頼み以てすべてのことを行ふ」ことであり、それは「霊能のこと」「我が靈魂の本能性」だとするのである。ここに登場する「真(まこと)」とは誠(まこと)と漢字の違うものであるが、誠の姿勢でキリスト教信仰を追求しながら、内村自身は自覚的に、キリスト教の真理という意味での「真」、つまり日本古来の在来宗教ではないキリスト教の真理という意味での「真(まこと)」なのではないかと思われる。真理をまことと読ませる使用もたびたびであったからである。つまり、信仰姿勢として日本的「誠(まこと)」を以て信仰を求めながら、教会としては、求めた真理という意味での「真(まこと)」の教会として、それが「私」の「無」を中心とした聖霊によって満たされるべき「無教会」の姿なのだとする。証明的方法を以て真理に到達するという窮理の姿勢をとるキルケゴールを退け、純粹さの証しというかのごとく、信仰の根源問題であるイエスの神認識をそのまま受け入れることを宣言している。この点も私を捨てて天地人倫の根源的真実と一体であるとする誠の精神の姿勢に通じるところであると言えよう。

5 おわりに

これまで内村の「無教会」を「無」を中心として、「私」の「無」との関連の中で「無教会」を再考した。それは、内村自身も積極的に「無教会」を制度の否定として訴

68) 聖書『コリント後書5章7節』

69) 聖書『ヨブ記13章15節』

えていた時期と、また、「無教会」の表現が、教会の存在様式を越えた精神的要素の中に意義を主張した時期において考察を試みた。さらに、対照的に一般的キリスト教、内村が親近感・共感を抱いた仏教、また、日本ではないところの「無教会」者と呼んだキルケゴールとの比較を様々な角度から対照的に検討を試みた。

内村の「無教会」とは、制度を重視したと見た日本のキリスト教と差別化し、より信仰的であること、それは聖霊の働きを中心とした、しかし、キリスト教で言うリバイバルとは異なる、「私」に直接働く神の聖霊を中心とした教会をいう。この聖霊の働きが「私」にもたらず役割が強化される時、イエスの神認識に関する懐疑・仏教認識などが積極的に転換期を迎えているのである。そして、その聖霊の働きにより「私」が「無」となったときの信仰的動揺の克服がまさしく、日本人のこのころの在り方を示す「誠」の姿勢であったと言えるのである。イエスの神認識の証明に関し「不可知」とする態度、即ち、理の窮理を追求しない「おかれた場における主観的心情の純粹さの追求」「心情の無私性の追求」というまさに日本的な精神の表れを見せた信仰であったと言えよう。

信仰的動揺の克服に関して、イエスの神認識への考察をキルケゴールの「瞬間」との比較を行い、日本のかどうかの検証も行った。「神の受肉」の問題は、人であるイエスを神として認識する「瞬間」が神からの恩寵として捉えられている点、キルケゴールにおいても神からの人間への働きかけである。これは、内村のイエス認識が聖霊の働きを以てなされるという、神から人間への働きかけという点では同じである。しかし、キルケゴールと内村の決定的違いは「私」の在り方である。「私」の「有」「無」において決定的に違うのである。さらに、内村がキルケゴールを捉えた視線は、「無教会主義者」としての姿であった。キルケゴールには実質的に論理の中にも教会の批判が見られないばかりでなく、内容面においても神認識の理知的、主知的ものが主眼であることを勘案するとき、内村の言う「無教会主義者」ではなかったことが推察される。

内村の「無教会」とは、制度的否定を追求していた「私」がまだ「有」として残り、外的に教会制度の否定を重視していた時代から、信仰的に深化路程を辿ることにより、神との関係に変化が到来し、神からの聖霊の働きを以て「無」となった「私」の「真(まこと)」の信仰の形態であったと言えよう。このとき「私」の「無」の中に日本的誠の精神が表出していたことが確認できたと言えよう。本稿では、「無教会」に表れた精神を日本思想からの観点で分析がなされたものの、紙面上十分ではないため、次回の研究でその連関性をより重点的に分析したい。

【参考文献】

- 閔庚培(1984) 『韓国基督教会史』、大韓基督教出版社
- 김병국(2008) 『일본기독교와 우치무라 칸조(内村鑑三)의 無教会主義에 관한 연구』, 강원대학교 일반대학원 학위논문(박사)
- 전실현(2005) 『内村鑑三의 無教会主義 批判 : 内村鑑三 全集을 중심으로』、總神大学校 神学大学院 학위논문(석사)
- 聖書(1986)、日本聖書教会
- 内村鑑三(1980-1984) 『内村鑑三全集』、岩波書店
- 内村鑑三(1962) 『明治文学全集39』、筑摩書房
- 相良享(1989) 『日本の思想「理・自然・天・心・伝統」』、ペリかん社
- キルケゴール・栢田啓三郎編集(1979) 『世界の名著51キルケゴール』、中央公論社
- 鈴木範久(1984) 『内村鑑三』、岩波新書
- 富岡幸一郎(2004) 『内村鑑三 偉大なる罪人の生涯』、リブレポート
- 丸山正男(1961) 『日本の思想』、岩波書店
- 芦名定道(2006) 『アジア・キリスト教研究に向けて(2)ー方法と適用ー』、アジア・キリスト教・多元性現代キリスト教思想研究会 第4号, 「アジア・日本のキリスト教と宗教的多元性」研究会
- 泉治典(2007) 「「内村鑑三の無教会主義」ーその聖書解釈にそくして」 『内村鑑三研究』第40号, キリスト教図書出版社
- 渋谷浩(1980) 「内村鑑三の無教会主義における「二つのJ」」 『内村鑑三研究』第14号, キリスト教図書出版社
- 鈴木貴久子(2009) 『内村鑑三に見る聖霊の働きに関する一考察』 比較日本学20号, 漢陽大学校 日本国際比較研究所

要 旨

This report is the article that assigned a focus to a meaning of "Non" of "Non-Church" of Kanzou Uchimura. I confirm a form of the faith to gain power by the negation of a "church" system and the ceremony that Uchimura intended consciously by "Non-Church" newly. "God's country", "construction of heaven" and "Catholic Church" becomes desire in place of "a church", but the God recognition as "a complete person" of Jesus Christ establishes it by the work of The Holy Spirit then, and it is it that I put an end to a suffering theological newly. I examine whether a Japanese way of element contains it in the faith posture that "Non-Church" pursued of Uchimura.

At first, in comparison with the heritage, "I" confirm God recognition as "the complete person" of Jesus Christ from a state named "the existence" that "I" stay through the work of The Holy Spirit who assumed that Uchimura is different from the Christian revival because it is it in "nothing". In addition, in this God recognition, I confirm that "my" "Non" is concerned with the change of the opinion for the Jodo sect of Buddhism / the Jodo Shin sect of Buddhism that an object to depend on resembles crucially. Furthermore, I was contrastive, and Uchimura considered God recognition of "person who should have named my leader" it and Kierkegaard who assumed it person from "Non-Church" whether "Non" of this "me" contained a Japanese way of element by examining. "Non-Church" of Uchimura may right confirm whether you contain a Japanese way of element one object and the self, the commonality of it being it with one oneself and others by a difference point with the God recognition of Kierkegaard through the logic of the intellectualism called "the moment", one, feelings called Japanese mind "Makoto".

キーワード：・無教会 ・「私」の「有」「無」 ・まこと ・阿弥陀仏
・聖霊 ・日本 ・瞬間

투 고 : 2011. 5. 31
1차 심사 : 2011. 6. 11
2차 심사 : 2011. 6. 25